

研究ノート

初年次教育におけるビブリオバトルの手法を用いた取り組みと課題

——「大阪観光大学国際交流学部第一回図書紹介バトル」実践報告と事後アンケート結果から——

A Practical Report of First-Year Experience on utilizing method of a social book review game :Bibliobattle

湯浅千映子*

YUASA Chieko

The purpose of this paper is to clarify whether or not it is possible to implement a book review game when teaching university students in their first year experiences. In this paper, we reported the following below;(1) "Studio IA" course content for participating a social book review game (2) Detailed contents of the social book review game held at university (3) Analysis of questionnaires conducted after the social book review game was held. we analyzed the questionnaire of participating students. As a result, we found that it is meaningful for students to experience and participate in the presentation of the "Bibliobattle" method in their first year experiences at university.

キーワード：ビブリオバトル (Bibliobattle), 初年次教育 (First Year Experiences), 実践研究 (aquestionnaire)

1. はじめに

大阪観光大学国際交流学部では、大学に入学して間もない学部 1 年生を対象に、初年次教育を実施している。

2018 年前期の 1 年生科目に「スタジオ 1 A」がある。「スタジオ I A」の授業は、後期から各教員の専門分野に分かれて始動する「本スタジオ (ゼミ)」授業のプレ段階に位置付けられる。

「スタジオ I A」では、「講義を聞き、ノートを取る」、「図書館で資料を探す」、「レポートを書く」、「口頭発表をする」といった、大学の学びで必要とされるスタディスキルの習得を到達目標に掲げ、授業を展開した。

また、「スタジオ 1 A」授業の集大成として、図書館で借りた本を精読し、本の内容を要約し、根拠を示した上で自身の意見を主張する「ブック・レポート」を最終課題とした。

この「スタジオ 1 A」における授業成果を口頭発表という形態で披露する場として、学部を挙げて行ったのが、大阪観光大学の大学祭企画「図書紹介バトル」大会である。これは、谷口忠大氏が提唱する「ビブリオバトル」の理念とその方法に準じたものである。

「ビブリオバトル」とは、参加者が好きな本を持ち寄り、本の魅力をスピーチし、読みたいと思う本（「チャンプ本」）を選ぶ書評ゲームを指す。谷口（2013）は、「書評を媒介としたコミュニケーションの場づくりのツール」と定義している。

「ビブリオバトル普及委員会」が定めた公式ルール (<http://www.bibliobattle.jp/home>) によると、「1. 発表参加者が読んで面白かった本を持って集まる」→「2. 順番に一人 5 分間で本を紹介する」→「3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを 2～3 分行う」→「4. 全ての発表が終了した後に『どの本が一番読みたくなったか?』を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする」とある。

ただし、「一人 5 分間で本を紹介する」という公式ルールに則って行うにあたり、ある懸念が生じた。それは、本学は、学部留学生が在籍学生の半数を占めており、「ビブリオバトル」が学生有志の個人発表の場となることで、日本語能力のレベルが異なる学生間で、主体的に学びに取り組む態度に差が生じてしまうのではないかということである。

*大阪観光大学国際交流学部講師

そこで、本学が開催する大会は、国籍も日本語学習歴も問わず、すべての学生が大会の出場者となり、大勢の前で発表するという経験を積むことを優先させ、「スタジオオ(ゼミ)」の中で複数のチーム(1チーム4名から6名)を編成して競う方式を採った。

よって、従来の「ビブリオバトル」とは一線を画す独自のルールで行っており、「図書紹介バトル」と称することとする。

では、こうした「ビブリオバトル」の手法を初年次教育に導入したのはなぜか。

「図書紹介バトル」参加に向けての準備段階では、図書館で「情報収集」をし、本を探す。その本の紹介文を「レポート」として書く。また、「図書紹介バトル」に実際に参加する段階は、「口頭発表」の実践の場とも言える。「図書紹介バトル」参加の過程は、こうしたスタディスキルの要素も併せ持っており、初年次段階の学修に有効であると考えたからである。

1970年代にアメリカで始まった初年次教育は、国際的には「First Year Experience (初年次体験)」と呼ばれた。「図書紹介バトル」に参加することで、大学の学びを一通り体験することが可能となるだろう。

本稿で報告するのは、以下の3点である。

- 1) 「図書紹介バトル」大会に向けての前期「スタジオ I A」・後期「スタジオ I B」授業の概要
- 2) 「図書紹介バトル」大会の概要
- 3) 大会後アンケート結果の分析

2. 先行研究

(1) 「ビブリオバトル」の本質

谷口(2013)では、「書評を媒介としたコミュニケーションの場づくり手法」である「ビブリオバトル」に、以下のような4つの機能があるとする。

- ① 「書籍情報共有機能」
(参加者で本の内容を共有できる)
- ② 「スピーチ能力向上機能」(スピーチの訓練になる)
- ③ 「良書探索機能」(いい本が見つかる)
- ④ 「コミュニティ開発機能」(お互いの理解が深まる)

これら4つの機能については、谷口ほか(2010)でも言及している。1で書籍の内容についての情報を共有するだけではなく、2で口頭発表の能力を上げ、3で良い本と出会う。さらに4で各参加者の個性(キャラクター)や人格的情報を共有することになるという。発表者の好みや興味・関心、どんな性格の持ち主なのかを互いに知り、それが組織内のコミュニケーションの円滑化につながるとしている。

(2) 大学教育における「ビブリオバトル」の実践

住木(2016)では、本学図書館のラーニング・コモンズで実施した「ビブリオバトル」の様子が報告されている。4年生対象のゼミナール授業で、図書館の蔵書から自身が手に取った本を3分で紹介する「即興ビブリオバトル」・教員が提示した本について、本のタイトルや著書から本の内容を想像して話す「妄想ビブリオバトル」を行ったという。

他に大学のゼミ授業、初年次教育、「文章表現法」などの授業における「ビブリオバトル」の実践を紹介した論文がある。中でも、九州国際大学(2014)が大学図書館を主体として行った「ビブリオバトル」の報告には、発表のアイデアを膨らませるためのワークシート、実際の発表用原稿を作るためのレジュメシート、参加者による発表評価の方法を提案するなど、実態に即した内容が見られる。「ビブリオバトル」の事前・事後にアンケートを実施しており、その分析もあった。

日本語教育分野の「ビブリオバトル」に関する研究は、山路(2013)が先駆である。日本語プレゼンテーション能力の向上のため、学部留学生や大学院生を対象に、授業の中でビブリオバトルを実践し、2度にわたる自己評価アンケートで学びの成長を見ている。堀(2016)も留学生の口頭表現クラスの中でビブリオバトルを行い、ルーブリック方式で自己の発表を評価させる取り組みを紹介している。

3. 大会発表に向けた授業の概要

(1) 前期「スタジオ 1 A」の授業全体について

「スタジオ I A」の授業は、8名の教員が担当した。この授業では、「スタジオ(ゼミ)」共通のシラバスと共

通の授業資料に沿って、「スタジオ (ゼミ)」担当の各教員が「図書紹介バトル」開催を意識した授業を行った。

4 月の第 2 回「スタジオ I A」授業では、大学図書館員の皆様の協力のもと、「図書館ツアー」が実施された。ここでは、図書館を巡り、図書に触れ、蔵書の検索のしかたなどを学んだ。さらに、第 10 回の授業時に「図書紹介バトル」の概要を伝え、参考とする「ビブリオバトル」の実際の映像を鑑賞した。第 11 回から 5 回にわたり、「ブック・レポート」を書く実践を段階的に行った。

筆者が担当した「スタジオ I A」授業の第 9 回以降の学修項目と活動内容を以下に記す。

表 1 「スタジオ I A」の授業内容

第 9 回	意見を伝える 1 論理的な文章とは？／事実と意見のちがひ
第 10 回	意見を伝える 2 意見文の 3 要素 (話題・理由・主張) を知る／客観的な文章とは？
第 11 回	ブック・レポートを書く 1 ブック・レポートの構成を知る・本に関する情報、本のテーマ (主題) を書く
第 12 回	ブック・レポートを書く 2 本の具体的内容 (あらすじ) を要約する
第 13 回	ブック・レポートを書く 3 本に対する感想を書く
第 14 回	ブック・レポートを書く 4 評価 (本の中でおすすめしたい点・自分と本の関わり) を書く
第 15 回	ブック・レポートを書く 5 まとめを書く／はじめ・なか・おわりを通して書く

筆者が担当のクラスメンバーは、学部留学生のみ 15 名で構成されていた。日本語学習歴が長くない学生が多いことから、課題図書として『日本語多読ライブラリー』・『にほんご多読ボックス』シリーズを指定し、その中から各々が好きだと思う物語を読むこととした。

第 11 回授業では、「図書館ツアー」で一度手にし、実際に借りた図書を精読することから取り掛かった。

全 15 回の授業を終え、期末レポート課題「ブック・レポート」の完成をもって、「スタジオ I A」授業の到達目

標を達成したものと見なした。期末レポートの作成には、河野 (2018) の「テキスト批評」の全体構成を参照した。

(2) 「ブック・レポート」の完成

谷口 (2013) は、「ビブリオバトル」では、配布レジюмеやスライドを準備せず、手元のレジюмеも用意しないことが基本だとしている。発表用の原稿を手元に置き、読み上げる方式の発表は望ましくないという。一方で、「原稿を準備する場合には、発表前に何度か練習して原稿の内容をいったん消化し、要点を整理して頭に入れた上で、発表時はその場で目の前のみんなに向かって自分の言葉で改めて言葉を紡ぎ出す」方がよいとし、発表用原稿を作成すること自体を否定しているわけではない。

よって、前期「スタジオ I A」授業で、紹介したい本について、「図書紹介バトル」の発表用原稿を意識した「ブック・レポート」としてまとめ、後期「スタジオ I B」授業で、前期に書き上げたレポートを精査し、その中から実際の発表時に何を話すのか、選別するという授業展開とした。

では、その「ブック・レポート」に何を書かか。

赤池・谷口 (2014) は、「ビブリオバトル」の発表時間の中で語られる発話内容を、「書評本 (書評本の内容や構成などに関する発話)」・「書評者 (書評者に考え経験などに関する発話)」・「その他 (挨拶や視聴者への質問などそれ以外の発話)」の 3 つのカテゴリーに分類している。

さらに、この 3 つのカテゴリーに関し、19 種のサブカテゴリーを示している。

このうち、「書評本」のサブカテゴリーには、「内容」・「構成」・「著者」・「引用」・「具体例」・「導入 (本や著者の名前、発行年度等の紹介)」・「まとめ (書評全体のまとめ)」があり、「書評者」のサブカテゴリーには、「推測 (内容に関する自身の推測を紹介)」・「共感 (聞き手に対して共感できるであろう事柄を紹介)」・「感想」・「経験」・「動機 (本を読んだ、または勧めた動機)」・「推奨」があるとされている。

以上の研究を参照しつつ、「スタジオ I A」授業における「ブック・レポート」の作成にあたっては、九州国際大学 (2014) の報告書の資料「ビブリオバトル・プレゼンテーション用原稿作成シート」の方式を活用した。

ここでは、「ビブリオバトルにおけるプレゼンテーシ

ョンの基本的な流れ」として、以下の 6 点をあげている。

- (0) マクラ (導入) からの～～→本の題名と著者名の紹介
- (1) 本のテーマ (論説ならば核的主張, 小説ならば基本的なあらすじ)
- (2) 内容
- (3) 感想
- (4) お薦めできる理由, 自分と本との関わり等
- (5) まとめ

赤池・谷口 (2014) のカテゴリでは、(0)～(2)と(5)が「書評本」のサブカテゴリーに、(3)・(4)が「書評者」のサブカテゴリーに相当する。

以上 6 つの要素を「スタジオ I A」授業の第 10 回で学んだ意見文の 3 要素 (話題・理由・主張) や河野 (2018) の構成をもとに整理し、「はじめ」・「なか」・「おわり」の三部構成で「ブック・レポート」の全体像を示した。

表 2 「スタジオ I A」の「ブック・レポート」の構成

【はじめ 1】 「話題」 50 字	本に関する情報 (本の題名, 著者名, 著者について) の紹介
【はじめ 2】 「話題」 100 字	本全体のテーマ (主題や簡単なあらすじの説明)
【なか 1】 「理由」 400～600 字	本の内容の要約 (目次ごとの説明やくわしいあらすじの説明, 好きな登場人物や印象的な場面, 心に残った文章の説明)
【なか 2】 「理由」 300～400 字	感想 (本を読んで感じたこと・考えたこと)
【なか 3】 「理由」 100～200 字	評価 (その本について, おすすめしたい点は何か)
【なか 4】 「理由」 100～200 字	自分と本との関わり (その本を読み, これから自分はどう行動するか)
【おわり】	まとめ (いちばん心に残ったこと・本

「主張」 100～150 字	についていちばん伝えたいこと)
-------------------	-----------------

九州国際大学 (2014) の「原稿シート」では、(0)～(6)の各要素の目標文字数が示され、少ない文字数で書き始め、少しずつ文字数を増やして書いていくことを提案している。そこで、本授業の「ブック・レポート」においても、目安となる文字数を指示し、レポート作成に取り組んだ。

また、この「原稿シート」では、(2)の「内容」の段階で、本に書かれた物語の流れに沿って、箇条書きで列挙し、そこに理由・根拠・証拠や具体例を書き加えることで、内容を膨らませていく書き方をすすめている。

筆者のクラスの学部留学生は、レベル別の語彙で書かれた『日本語多読ライブラリー』・『ほんご多読ブックス』シリーズの図書を読み、ストーリーの流れを容易につかんでいた。一方で、理解したストーリーを順序立てて説明する、印象的な場面を取り上げて詳しく説明するといった、要約の作業に苦心する様子が見受けられた。

しかしながら、ページをめくり、印象的な内容を箇条書きで列挙し、その中から気になった部分を抜き出し、そこに詳細な描写を加え、それらを順序立てて述べることで、本の要点を把握することができ、ポイントを絞って、詳述する際にも効果的であった。

「ブック・レポート」を完成させた後の前期授業の最終回では、クラスメンバーの学生一人ひとりが 3 分程度、「ブック・レポート」のために読んできた本を用いて、即興で紹介し合う「ミニ・ビブリオバトル」を実施した。

(3) 後期「スタジオ 1 B」の授業

後期「スタジオ 1 B」は、前期とは異なる新たなメンバーを迎え、日本人学生 1 名を含む 15 名が在籍し、彼らと「図書紹介バトル」の準備に取り掛かることとなった。

大学祭が行われる第 5 回授業までは、各「スタジオ」で教員の専門分野に関する授業と並行し、「図書紹介バトル」の練習にあたった。

筆者の「スタジオ」授業では、2 スタジオ合同 (計 30 名・うち日本人学生 1 名) で、チームに分かれ、発表することとした。初回の授業では、顔合わせの後、4 つの「スタジオ」混成チームに分かれ、チームメンバーが「ブ

ック・レポート」の課題で紹介した本の中で、どの本をチームとして紹介するかを決めた。

第1回～第5回の授業は、以下の通り進行した。

表3 「スタジオIB」の授業内容

第1回 「図書紹介バトル」の準備1 チーム内で本を紹介し合い、「紹介本」を選定
第2回 「図書紹介バトル」の準備2 チーム内で「紹介本」を読み合い、「図書紹介バトル」で話す内容を書き出す
第3回 「図書紹介バトル」の準備3 「図書紹介バトル」で話す内容を絞り、「図書紹介バトル」用のワークシートに記入
第4回 「図書紹介バトル」の練習1 チームごとにワークシートを見ながら、文に再生して発表する練習
第5回 「図書紹介バトル」の練習2 本番の会場である大教室にて、リハーサル

第2回授業で、チーム内で「紹介本」のどんな内容について発表するか、検討した。前期「ブック・レポート」で書いた6つの要素に加え、発表の際に興味をひく要素として、「いちばん好きなページ」・「本を読んでほしい人」などの項目を候補に加え、チームメンバーが互いにアイデアを出し合った。

第3回授業では、5分という発表時間の中で、どんなテーマで何を話すのか、その項目とその内容を決定し、筆者が作成した「図書紹介バトル」用のワークシートに記入させた。

その際、チームメンバーの一人ひとりが何らかの内容を発表する役割を担っており、誰一人欠けても発表が成立しないことをメンバー間に強く意識化させることを狙って、ワークシートの形式に工夫を凝らした。

例えば、6名のチームの場合、1チームの発表時間5分のうち、一人の持ち時間を1分とし、①「本の情報」・②「本のあらすじ」・③「感想や評価」・④「読んでほしい人」・⑤「まとめ(観覧者へのメッセージ)」の順でチームのメンバーそれぞれが発表するよう、指示した。残る1名は、質疑応答で質問に答える役割とした。

図1 「図書紹介バトル」学生配布のワークシートの例

名前	名前	名前	名前	名前
1分	1分から2分	2分から3分	3分から4分	4分から5分
①本の情報	②本のあらすじ	③感想や評価	④読んでほしい人	⑤メッセージ(まとめ)
さん(2分) 質問に答える どんな質問がある?				

図1に示したワークシートは、時系列に左から右に並んでおり、メンバーの名前、発表の経過時間、発表する内容を書き込んだ。話す内容の欄は、単文や語句の形でメモ書きとした。また、質疑応答タイムに、観覧者からどんな質問が来るか、予想を立て、書き込んだ。こうした工夫により、ワークシートを見れば、チームの誰がどの段階で何を話すのかが一目で理解できた。

第4回授業では、ワークシートにメモ書きした内容を文章化し、声に出して話す練習を行った。前に見た谷口(2013)の「ビブリオバトル」の原則に従い、発表原稿を読み上げるのではなく、「その場で目の前の観衆に向かって自分の言葉で改めて言葉を紡ぎ出す」よう、ワークシートに書かれた内容を目で追いつながりながら、自由に語ることを意識付けした。

ワークシートについて、もう一つの工夫した点は、用意するワークシートを1枚のみとしたことである。発表者が各々でメモ書きを用意すると、メンバーの個人練習になってしまう。しかし、チーム全員が1枚のワークシートの周りを囲み、ワークシートを見ながら発表の練習をすることで、自然と互いに発表する様子に注目するようになり、メンバーの間違いを指摘し合う姿も見られた。

大学祭の直前となる第5回の授業と、大会の前々日には、会場となる大講義室に「図書紹介バトル」の出場者全員が集まり、リハーサルを行った。壇上に上がり、5分という制限時間を計り、発表の最終確認を行った。

会場での発表時にも教卓にワークシートを置き、メンバーが変わるがわる教卓の前に移動し、語るという発表形態を取った。これにより、5分間の中で、当該時間の発表者は誰か、観客の視線を集中させることができた。

最後に、各チームの名前と当日の発表順を決定した。チーム間の一体感がいっそう高まったように思われる。

4. 大会当日の概要

「図書紹介バトル」は、本学の大学祭「明光祭」2 日目の 2018 年 10 月 28 日に執り行われた。参加学生、「スタジオ」担当教員のほか、学内や外部からの観覧者も来場して下さった。

大会当日の式次第は、以下の通りである。

13 時開会

- ①開会の挨拶・進行説明
- ②11 チームの発表
- ③参加者投票と集計
- ④表彰式（賞状と副賞の授与）
- ⑤全体写真撮影

15 時 30 分頃閉会

大会開催までの準備と当日の運営について説明する。大会の 1 か月前から「図書紹介バトル」の告知ポスターを学内に貼り出し、当日の会場で配布する、式次第の書かれたプログラムを作成した。参加者投票で使用する大学ロゴの入ったうちわ、優秀チームや個人を表彰するための賞状や副賞の商品も手配した。

また、本大会では、本学「スタジオ」担当教員が本学の「図書紹介バトル」用に独自に開発した特製タイマーを使用した。会場のスクリーン上に飛行機の形をしたアイコンが映し出され、バトル開始とともにそのアイコンが離陸し、空を飛び、制限時間になると着陸、ホイッスルの音が知らせるという仕組みである。

次に、大会の参加者について説明する。

本大会には、6 スタジオ（担当教員 7 名）が参加し、スタジオ内で各 2 チームを編成し（筆者の「スタジオ」は、2 スタジオ合同で 4 チーム）、計 11 チームが参加した。その内訳は、日本人学生 3 名・学部留学生 55 名。

チーム名と紹介した本の情報を以下に記す（発表順）。

表 4 「図書紹介バトル」の「紹介本」

チーム名	紹介した本
アインズ・ウール・ゴウン	富塚 清『ライト兄弟—大空への夢を実現した兄弟の物語—』三樹書房（2003）
青春（あおはる）	押見修造『志乃ちゃんは自分の名前が言えない』太田出版（2012）
エルス	オスカー・ワイルド『幸せな王子』『レベル別日本語多読ライブラリーにほんごよむよむ文庫レベル 3 vol. 3』アスク出版（2009）
大盛り	木藤亜也『1 リットルの涙—難病と闘い続ける少女亜也の日記』幻冬舎文庫（2005）
純	「中国の悲しい恋物語—「孟姜女」梁山伯と祝英台」『にほんご多読ボックス vol. 5』大修館書店（2016）
新秀	嘉成晴香『会いたくなったらいつでも会える』文芸社（2002）
超元気	村上春樹『ノルウェイの森』講談社文庫（2004）
ハニー	小泉八雲『雪女』『レベル別日本語多読ライブラリー にほんごよむよむ文庫 レベル 4 vol. 1』アスク出版（2006）
美少女戦士	東野圭吾『変身』講談社文庫（1994）
野獣派	東野圭吾『容疑者 X の献身』文春文庫（2008）
u n i t e	都会生活研究プロジェクト[関西チーム]『大阪ルール』中経出版（2007）

各チーム 5 分の発表時間の後、2 分程度の質問タイムを設けた。観覧者からは、「紹介本」について、次のような質問が出た。

表 5 「図書紹介バトル」発表時の質問内容の一部

<ul style="list-style-type: none"> ・「ライト兄弟について書いた本は多くあるが、あえてこの本を選んだ理由は？」 ・「登場人物の志乃ちゃんと加代ちゃんの関係が話の中で変わっていくことについてどう感じた？」（『志乃ちゃんは自分の名前が言えない』） ・「『幸せな王子』を読み、幸せとは何だと思う？」 ・「シビアな内容の本をあえて紹介した理由は？」（『1 リットルの涙』） ・「韓国やベトナムにも悲しい恋物語がありますか？」
--

(『中国の悲しい恋物語』)

- ・「勇気をもったら、その勇気をどんなことに使う？」
- (『会いたくなったらいつでも会える』)
- ・「主人公の彼女のように、周りに病気で苦しんでいる人がいたら、どうする？」(『ノルウェイの森』)
- ・『『雪女』は、映画化されているが、本と映画とどちらが好きか？』
- ・「もし変身できるなら、どんな人になりたいか？」(『変身』)
- ・「ストーリーの結末は、よい結末だったか？他にどんな結末が考えられる？」(『容疑者Xの献身』)
- ・「大阪では、エスカレーター右に立つ習慣があることについて、本の中に紹介してあった？」(『大阪ルール』)

学部留学生のみで構成されたチームの中には、難解な質問を前に頭を抱え、一瞬、沈黙が流れる場面もあったが、チームメンバーのみならず、他チームの参加者が助け船を出し、回答するなど、和やかに会は進行した。

発表を終え、来場者や参加学生、教員による投票の結果、『大阪ルール』を紹介したチーム「unite」(日本人学生1名・学部留学生3名)が第一位となった。

後にリーダーの学生にその勝因をたずねたところ、『大阪ルール』の本は、テーマ自体が興味深い点、大阪に関する様々な真実が数ページでまとめてあり、気になる項目を取り上げ、紹介することで、物語のあらすじを順を追って説明するよりも伝えやすかったと答えている。

5. アンケートの分析

(1) 調査1 来場者アンケート

「図書紹介バトル」終了後、「来場者」・「参加学生」・「スタジオ担当教員」を対象にアンケートを実施した。

まず、「来場者アンケート」では、「発表を聞き、本の内容がわかったか」、「発表を聞き、本に対する思いや考えが伝わったか」・「発表に対する態度」などを3段階評価でたずねた。

5名の回答があり、いずれの項目も「a よかった」との高評価を得た(平均2.8)。自由回答では、「(従来の図書バトルを期待して観に来たが)、留学生の発表する姿が興味深かった」、「人前で発表するのは意外と難しいと

思うが、特に留学生が母語以外の言語で発表する様子が素晴らしかった」・「教員がかける言葉があたたかく、指導される学生がうらやましく思った」・「自分が持っている本も紹介されたが、長く読んでいないので、もう一度読みたいと思った」・「飛行機で時間経過を表示させるアイデアがおもしろい」などの声があった。

(2) 調査2 出場者アンケート

1) 調査の概要

「出場者アンケート」では、発表者として、また、発表を見守る観戦者として、さらには、大会の運営に携わる一員としての意見をたずねた。

アンケート項目は、九州国際大学図書館(2014)・山路(2013)を参照し、以下の22の設問を立てた。

表6 「図書紹介バトル」のアンケート項目

1. [質問] 図書紹介バトルで発表できて、楽しかったですか。
2. [質問] 図書紹介バトルで他の参加者の発表も聞くことができ、楽しかったですか。
3. [質問] 図書紹介バトルで他の参加者の発表を判定することができて、楽しかったですか。
4. [質問] 図書紹介バトルに参加して、本を読むことが好きになりましたか。
5. [質問] 他の発表者が紹介した本も読みたいと思いましたか。
6. [質問] 5で「はい(ぜひ読みたい)」・「まあまあ(図書館で手に入れば読みたい)」と答えた人に質問します。「読みたい」と思った本のタイトルを書いてください。(自由回答)
7. [質問] 大勢の人前で話すことが得意になりましたか。
8. [質問] 自分の発表に満足していますか。
9. [質問] 「図書紹介バトル」当日まで、チーム全員で発表の準備ができましたか。
10. [質問] 発表の時、リーダーを中心にチーム全員が協力していたと思いますか。
11. [質問] 発表の時、あなた自身は、チームの中での自分の役割を果たすことができましたか。
12. [質問] 発表を聴いた人が自分のチームの発表に興味を持ってくれたと思いますか。
13. [質問] 発表を聴いた人に自分のチームが発表した本の

内容が伝わったと思いますか。

14. [質問] 発表を聴いた人に自分のチームが発表した本に対する気持ち・考えが伝わったと思いますか。

15. [質問] 発表を聴いた人にわかりやすいように大きな声でゆっくり話すことができましたか。

16. [質問] 発表する時に必要とされる言葉遣い(「です・ます」体を使って話す, など)を意識して話しましたか。

17. [質問] 発表する時の姿勢や態度はどうでしたか。前を見て, 元気に, 自信を持って発表できましたか。

18. [質問] 質問された時, 上手に質問に答えることができましたか。

19. [質問] 発表時間(スピーチ 5 分+質疑応答 3 分)を長いと感じましたか。短いと感じましたか。

20. [質問] 今回の図書紹介バトルで発表した経験がこれからの学び(レポートを書く, 口頭発表をする)の役に立つと思いますか。

21. [質問] 来年も国際交流学部の「図書紹介バトル」を観たいと思いますか。

22. [質問] 来年も国際交流学部の「図書紹介バトル」に参加したいと思いますか。

回答は, 「a はい b まあまあ c どちらとも言えない d いいえ」の 4 段階評価とした(19, 21, 22 は, 「a はい b まあまあ c いいえ」の 3 段階評価。6 は, 自由回答である)。

加えて, 自由記述式のアンケートとして, 「大会に参加してよかったこと・反省すること」・「来年の大会に期待すること(改善点)」についても質問した。

本調査は, 「図書紹介バトル」大会の終了後の 2 日後, 10 月 30 日(火)の「スタジオ I B」授業時に質問紙を一斉に配布し, 実施した。回答者は, 48 名。留学生か日本人学生かについては, 今回, 問題としなかった。

2) 調査結果

アンケートによる調査結果の 4 段階(設問 19, 21, 2 は, 3 段階)を「はい」を 3 点, 「いいえ」を 0 点として点数化し, その平均値を出した。

平均値が最も高かったものは, 質問 10 であった。以下, 高得点の項目を以下に挙げる。

10. 発表の時, リーダーを中心にチーム全員が協力していたと思いますか。

はい	25 名		25
まあまあ	21 名		21
どちらとも言えない	1 名		1
いいえ	1 名		1
平均	2.458		

1. 図書紹介バトルで発表できて, 楽しかったですか。

はい	25 名		23
まあまあ	21 名		21
どちらとも言えない	1 名		2
いいえ	1 名		2
平均	2.354		

2. 図書紹介バトルで他の参加者の発表も聞くことができ, 楽しかったですか。

はい	25 名		25
まあまあ	15 名		15
どちらとも言えない	6 名		6
いいえ	2 名		2
平均	2.313		

11. 発表の時, あなた自身は, チームの中での自分の役割を果たすことができましたか。

はい	17 名		17
まあまあ	27 名		27
どちらとも言えない	4 名		4
いいえ	0 名		0
平均	2.271		

9. 「図書紹介バトル」当日まで, チーム全員で発表の準備ができましたか。

はい	21 名		21
まあまあ	20 名		20
どちらとも言えない	5 名		5
いいえ	2 名		2
平均	2.25		

高得点だった問いは, 「図書紹介バトル」大会に参加し

での感想をたずねた質問 1, 2 や大会本番に向けてのチーム単位の活動状況をたずねた質問 9~11 に集中している。大会への参加や大会準備にチームで取り組んだことは、参加学生にとって好評だったと言えよう。

中でも得点が高かったのは、質問 10「リーダーを中心にチーム全員が協力していたか」、質問 11「チーム内で自身の役割を果たすことができたか」であった。

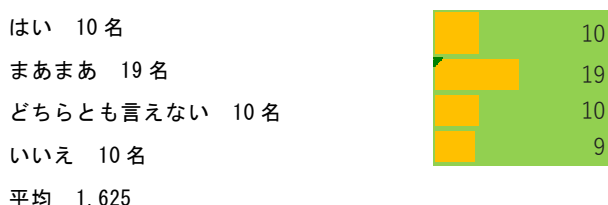
以上の回答結果から、チーム全体で協力し合い、チーム内部で自身の役割を果たせたと認識する学生が、「図書紹介バトル」大会の前、大会の発表時ともに多かったと言える。

「スタジオ」授業に参加する学生（特に学部留学生）の中には、個人で与えられた課題に取り組む際には集中力を発揮するものの、グループ単位で協力し合い、課題を解決していく協働学習を苦手とする者も少なくない。

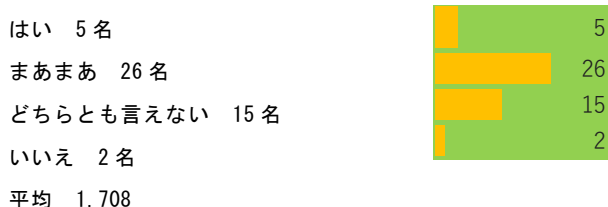
しかしながら、「図書紹介バトル」への参加を通し、互いが同じ目標に向かって準備や発表に取り組む、これによりチーム・ワークが醸成され、協働による学びが実現できたものと思われる。

一方、平均値が低かったのは、次の 5 つである。

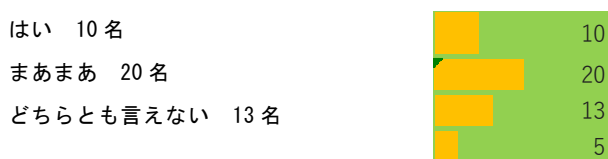
18. 質問された時、上手に質問に答えることができたと思いますか



7. 大勢の人の前で話すことが得意になりましたか。



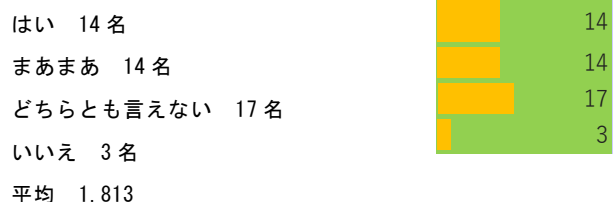
5. 他の発表者が紹介した本も読みたいと思いましたか。



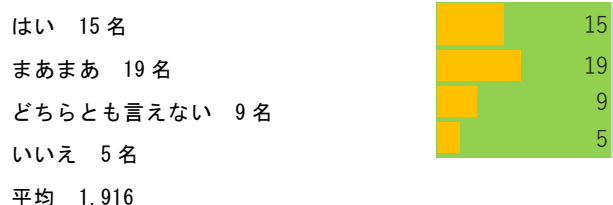
いいえ 5 名

平均 1.729

3. 図書紹介バトルで他の参加者の発表を判定することができて、楽しかったですか。



8. 自分の発表に満足していますか。



低得点だった質問 18 は、質疑応答についてである。「似たような話が自分の国にも存在する?」「もし変身できるなら、何に変身したい?」など、作品の内容を離れ、関連する情報や自身の立場に置き換えて考えるとといった問いに苦心していた。ある学生は、予想していた問いとは、全く異なっており、発表時に戸惑ったと話していた。

また、質問 7 の結果から、大会参加を経てもなお、大勢の前で話すことへの苦手意識を多くの学生が持っていることがうかがえる。

一方の問 15~問 17 で、発表時の声の大きさ、言葉遣い、発表に対する姿勢や態度についてたずねたが、これらの回答は、いずれも平均 3 以上で、大会当日の自身の発表に対する評価は、低くない。

他にも、質問 8 の回答から、自身の発表に対する満足度が低いことがわかった。これは、前述したチーム単位での活動の満足度の高さと比べ、対照的と言える。

発表の満足度を上げるには、不特定多数を前に発表する場を何度も経験し、即興で受けた質問にも素早く答えるトレーニングを重ねる必要がある。大勢の前で発表し、緊張が抑え切れなかった、思いがけない質問を受け、言葉に詰まった、そうした経験も、後に克服すれば、自信をもって口頭発表に臨むことができよう。

さらに、低得点だった 2 つの質問について考える。

質問 5 「他の人が紹介した本が読みたい」、質問 3 「他の参加者の発表を判定することが楽しかった」と答える人が少なかった。特に、「いちばん読みたい本」を決める際に、参加者の学生自身も判定に加わることに對し、参加学生の間で、「本」にはなく、「参加者」に投票している人がいるのでは、と抵抗感を示す声が上がった。

「図書紹介バトル」で発表した経験を通し、チーム内で助け合い、親睦を深めることはできたものの、他チームの参加者が発表する内容にも多くの関心を示し、チーム間で連携をとり、参加者全員で大会を盛り上げようという思いにまでは至らなかったものと思われる。

3) 自由回答から

ここでは、自由記述式のアンケートの言葉から、前出のアンケートの調査結果を補足したい。

「A 大会に参加してよかったこと・反省することは?」・「B 来年の大会に期待すること(改善点)は?」の 2 点について、自由回答欄に意見を寄せてもらった。48 名中 35 名から回答が得られた。

これらの回答を KH Coder (計量的なテキスト分析を行うフリーソフト) を用いて、回答文中の語を抽出し (総抽出語数 1420・異なり語数 294)、表記や意味を揃えた上で、頻出語を見た。

出現頻度上位の語 (度数 5 以上) は、以下の通りである。表中の数値は、出現数を示す。

発表 (31), 思う (31), 準備 (13), 声 (12), 本 (12), 時間 (11), 話す (11), お客 (10), 大会 (10), 参加 (10), 紹介 (8), 多い (8)

次に、A と B の質問に分け、それぞれを特徴づける語とそれらを含む回答の一例を紹介する。

「A 大会に参加してよかったこと・反省することは?」

思う 発表 大会 準備 緊張 少ない 参加 下手 質問 チーム 協力 仲

「準備が少し不足していた」・「発表する前にもっと準備します」・「準備の時間が全然なかった」・「スタジオのメンバーで協力して発表することで仲が深まった気がした」・「もっとチームといろいろと話して発表することを伝(え)たら一人ひとりの発表がよくなると思った」・し

っかり、練習をして頑張って覚えておいたのに、当時に発表するときは緊張しすぎて、上手くできなかった」・「みんなに発表を聞いた人にわかりやすいように大きな声でゆっくり話すことができた」

「B 来年の大会に期待すること・改善点は?」

声 時間 話す 本 紹介 多い お客 大きい 投票 期待

「十分に準備しておき、自信を持って、大き(な)声で話します」・「まず、でき(る)だけ前の人を見て原稿(メモ書きのこと)を見ない発表をしたほうがいいと思います」・「観客がもっと多くなりしたい」・「選手の中では投票しないで。人気の試合ではない」

(3) 調査 3 教員アンケート

「教員アンケート」では、「図書紹介バトル」終了後に「スタジオ」授業を担当する 6 名の教員からの回答を得た。アンケートの調査項目は、九州国際大学図書館(2014)を参照した。

初年次教育で「図書紹介バトル」の実施が有効かどうかを中心にたずねたところ、全員が有効であると答えた。

さらに、どんな点で有効だったのか、「a 本に親しみ、読書の楽しさを知る」、「b 文章を要約する力がつく」、「c 自身の考えや思いを客観的に説明する力がつく」、「d プレゼンテーション能力がつく」、「e チームで協働学習に取り組む」「その他(自由回答)」に分け、回答を求めた(複数回答)。最も多かったのは、d、e であった。

また、学部留学生にとって、日本語能力の向上に有効だったかについてたずねると、「大いに有効」「まあまあ有効」と答え、どんな点で有効かについては、「日本語口頭能力の向上」や「大勢の前で発表する場数を踏むこと」などの回答があった。

さらに、「スタジオ」授業において、「図書紹介バトル」大会への出場に際し、指導することが難しかったかどうかをたずねると、「どちらかと言えば難しい」との答えが最も多く、どんな点で難しかったかとの問いには、「学部留学生が日本語で本を紹介すること」が最も多く、「紹介する本の精読」、「大会の参加度に個人差が出るため、学

生が不公平感を感じないような評価方法を設定する」との回答があった。

他にも大会を終えての意見や感想を求めたところ、「1年前期の授業から1年後期の授業に移行して間もない時期に大会を開催したため、準備期間をどう設定するか、前期の授業でどこまで準備できるか、工夫が必要」との声があった。これは、参加学生対象のアンケートでも見られた意見である。

6. まとめ

本稿では、本学で初めて大々的に実施した大学祭企画「図書紹介バトル」の模様とともに、「図書紹介バトル」開催に向けての教育実践の歩みを紹介し、初年次教育の一環として行った、本学の「図書紹介バトル」大会参加を意識した授業展開が大学生にどういった教育効果をもたらすのかを考えた。

参加学生や教員のアンケート結果から、大学1年の後期に「ビブリオバトル」方式の発表会に学生全員が臨むことは、スタディスキルを身につけるとともに、学制同士の親睦を深め、その後の「スタジオ」授業で行われる協働の学びを活発化させることができる点で、意義深い試みであったと考える。

一方で、他のチームや他の発表者の紹介本に関心を示す学生が少なかったことが残念である。谷口(2013)の「本を通して人を知る」、「コミュニケーションの場作り」という「ビブリオバトル」の考え方を「図書紹介バトル」の参加学生に周知する必要があったと感じている。

今回開催した「図書紹介バトル」で紹介された本は、大会後、本学図書館の特設コーナーに展示された。「紹介本」が人との出会い・本との出会いを育み、図書館に足しげく通い、多くの図書に触れ、さまざまな知識を吸収し、また、図書について語らうきっかけとなることを願っている。

次年度以降も「図書紹介バトル」を開催する折には、出場者の参加学生にとって、また、会場に足を運ぶ観覧者にとって、そして各教員が「スタジオ」授業で取り組む初年次教育、特にレポートや口頭発表のスキル向上といった面からも、満足の行く大会としたいと考えている。

例えば、「ビブリオバトル」の本質を尊重した、学生有

志の個人による制限時間5分のスピーチ発表と併せ、全ての学生を主体的に活動に参加させるために、おすすめの本を自作のPOPやポスターで紹介し、会場の壁一面に貼り出す展示会を催す、あるいは、「ビブリオバトル」の合間に、「授業で使用する教科書」・「旅行ガイドブック」などのお題に合う本をグループ単位で発表するといった、企画色の強いプログラムも盛り込んで実施したいと考えている。

最後に「図書紹介バトル」の開催にご尽力くださった本学国際交流学部の教員の皆様に深く御礼申し上げます。

【引用・参考文献】

- 赤池勇磨・谷口忠大(2014)「ビブリオバトルにおける発表制限時間のデザイン」『日本経営工学会論文誌』65巻3号
- 九州国際大学図書館(2014)「教職協働で作る学修支援—ビブリオバトルの手法を活用したグループワークと読書ノートの構築—」私立大学図書館協会
- 河野哲也(2018)『レポート・論文の書き方入門 第4版』慶応義塾大学出版会
- 住木俊之(2016)「大阪観光大学図書館におけるラーニング・コモングスの活用」『大阪観光大学紀要』16号
- 谷口忠大(2013)『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』文春新書901 文藝春秋
- 谷口忠大・川上浩司・片井修(2010)「ビブリオバトル—書評により媒介される社会的相互作用場の設計」『ヒューマンインタフェース学会論文誌』12巻4号
- 深澤のぞみ(2017)「日本語教育におけるパブリックスピーキング—21世紀に必要な学びの1つとして—」『金沢大学留学生センター紀要』20号
- 堀恵子(2016)「〈報告〉上級者対象口頭表現クラスでの活動と自己評価の変化：アカデミック日本語として何を指すか」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31号
- 山路 奈保子, 須藤 秀紹, 李 セロン(2013)『「ビブリオバトル」導入の試み—日本語パブリックスピーキング技能育成のために—』『日本語教育』155号